

第十四回

遊び—カオスとコスモス

美哉幼稚園は「遊びの学校」を標榜しています。これは幼稚園としては実はオーソドクスです。「勉強はしません。でも勉強の基礎を遊びによって培います」と説明します。これは決意表明です。王道を行くという決意、遊びの探求に挑戦しようという決意、むつかしいことです。というのも、遊びというけれど、幅が広い。奥が深い。

今は泥んこ遊びだけなわの季節ですが、以前砂場で、夢中で水路を築いていた年長児が他の子どもに対して言いました。「遊びでかまをいじめよう。」

おもったいひすね。明らかに遊んでいるのにこの言葉。遊びとは真剣だということなのです。大人は「遊び」と「仕事」「遊び」と「勉強」という具合に分けて、考えます。だから、「おおそび」「遊び程度ならよい」などの言い方が出てきます。けれども、本当の遊びとは「遊び程度」といふことが、めづるべきなのです。

自発的で楽しくて能動的で創造的である。夢中で一心で、果ては、無心に行きついで、「私」の底を抜くのです。

いつも私たちは創造と破壊、カオスとコスモスなどのやがて対立して展開するものを一くくりに、泥いこの不思議なものの力にふれながら、体験します。この体験は、やがて伸びてゆく社会生活の基層部分に、刻まれます。



た者も維持するものも大人ですし、私も大人は子どもたちにそれを伝えなければなりません。過去の伝承です。

しかし、大人たちは、未知のものに開かれていなければ、硬直します。未来が過去の延長ではなく、新しいもののおとづれであってこそ、まだ見ぬ明日が希望になるのです。

未知なるものがうごめくカオスにおいては、主人公は子どもです。自分の長年築いた経験をゼロクリアする喜びを知っている大人も、主人公になれます。

カオスこそ、創造の源です。そして、社会が行き詰った時は、新たな秩序の源になるのもこれです。秩序から秩序をこねくり出しても縮小再生産にしかならないからです。

年少児は混沌そのもののような泥の感触を楽しんでいるように見えます。年長児になればカオスから更にコスモスの成立を楽しみます。山

ができます。川が流れます。町も人間関係も出現します。そして、終わりの時が来れば、創造した世界を惜しげもなく壊します。

お父さんお母さん、洗濯は大変でしょうけど、大人が教えることのできないものをたくさん教えてくれる泥という偉大な教師に、どうかたくさん触れさせてあげてください。



野菜という教師—— 関わり色々、学ぶこと色々



大きくなってきたから支柱を立てましょう



さくら1組2組は、好きな野菜と嫌いな野菜のナンバー1をそれぞれ植えました



お当番さんの水やり



収穫



ちゅうりつぷ・たんぼぼ組も植えました 土の感触を楽しみます



すみれ組のベランダはプチ菜園。 朝、幼稚園に来てお部屋に向かう楽しみが増えたようです。



手触り、色つや、匂い、味、



子どもたちは日々成長していますが、それに気づいているわけではありません。日々の変化が如実に見える野菜というものに触れながら、成長ということを体感的に把握していきます。